

參考資料

参考資料について

参考資料は、以下の内容を掲載した。

参考資料1「関連年譜」は、本考察に直接関連する事項及び、関連性がある重要事項を記載した。

参考資料2「屋宇轎車類乃油塗法」は、幕末に筆写された油画媒剤に関する処方であり、当時の油画媒剤認識を知る上で貴重な資料であると考え、全文を複写掲載した。またこれまで翻刻されてこなかったため、筆者が全文を翻刻した。筆者による翻刻文は、本文中に掲載した。

参考資料3「工学機器による支持体や地塗り層の調査資料」は、東京藝術大学所蔵作品や高橋由一作品等の光学機器による先行研究資料を収集してまとめ一覧にしたものである。明治前期の支持体や地塗り層を知る上で貴重な資料であると考え掲載した。

参考資料4「工学機器による絵具層の調査資料」は、参考資料3の作品の中で、顔料の成分分析が行われた先行研究資料を収集してまとめ一覧にしたものである。明治前期に用いられた顔料を知る上で貴重な資料であると考えて掲載した。さらに、明治前期に画塾彰義堂において用いられた翻訳油画技法書の原書付属カタログとの対比を行い、当時において最新であった顔料がどの程度用いられたのかを調べ一覧とした。

参考資料5「画学及彫像」と原書及び筆者による翻訳の一覧表」は、金子一夫氏が紹介された「画学及彫像」及び筆者による翻訳の対比一覧である。「画学及彫像」は、明治前期における油画技法材料に関する貴重な資料である。訳者の翻訳の傾向を分析することは、当時の油画技法材料認識を知る上で意義深いと考え、筆者による翻訳と対比して一覧表とした。

参考資料6「『油絵写景指南』、『油絵山水訣』と原書及び筆者による翻訳の一覧表」中に掲載した『油絵写景指南』は明治前期における油画技法材料に関する貴重な資料である。これまで二つの筆写本が紹介されてきた。一つは青木茂氏所蔵の坂広筆写により、もう一つは、金子一夫氏が紹介された岡忠精筆写による。これらの筆写本は、これまで翻刻されてこなかったため、岡忠精の筆写を中心に筆者が全文の翻刻を行い、坂広の記述が異なる部分は注記した。さらに訳者の翻訳の傾向を分析することは、当時の油画技法材料認識を知る上で意義深いと考え、筆者による翻訳と対比して一覧表とした。また、「油絵写景指南」の約8年後に刊行図書として出版された「油絵山水訣」も一覧表に記入して、「油絵写景指南」と「油絵山水訣」が同一の原書からの異なる翻訳であることを示すとともに、二つの翻訳の相違も示した。

参考資料7「岡忠精筆写『油絵写景指南』」は、参考資料6において筆者が翻刻した岡忠精筆写本の原本であり、筆者が秋田県公文書館において全文複写を行い、掲載したものである。

参考資料8「『油絵導志留邊』と原書及び筆者による翻訳の一覧表」中に掲載した、青木茂氏が翻刻紹介された「油絵導志留邊」は、明治前期における油画技法材料に関する貴重な資料である。訳者の翻訳の傾向を分析することは、当時の油画技法材料認識を知る上で意義深いと考え、筆者による翻訳と対比して一覧表とした。

参考資料9「岡忠精筆写『油絵道しるべ』」は、参考資料8において青木氏の翻刻の参考となった、金子一夫氏が紹介された岡忠精筆写本を、筆者が秋田県公文書館において全文複写を

行い、掲載したものである。

参考資料 1. 本考察関連年譜

関連年譜は、本考察に直接関連する事項及び、関連性がある重要事項のみを記載した。

明治 5 年(1872)12 月 2 日まで旧暦、12 月 3 日から太陽暦を実施し、明治 6 年(1873)1 月 1 日とする。

年	関連事項	関連作品	関連作家生没年
文化 8 年 (1811)	天文方に蕃書和解御用の翻訳局を創設。 『厚生新編』の翻訳始まる。 宇田川榕菴、宇田川玄真の養嗣子となる。		
文化 11 年 (1814)	高森観口述の『西洋畫談』を渡邊以親が筆録する。		
文化 13 年 (1816)	宇田川玄真、天文台訳員となり、『厚生新編』の翻訳に従事。		
文政 1 年 (1818)			司馬江漢没
文政 2 年 (1819)	宇田川玄真、『和蘭藥鏡』刊行。		
文政 6 年 (1823)			大田南畝没
文政 9 年 (1826)	佐藤成祐、『中陵漫録』刊行		
文政 10 年 (1827)	宇田川榕菴、天文台訳員となり、『厚生新編』の翻訳に従事。		
文政 11 年 (1828)	宇田川榛齋(玄真)述・宇田川榕菴校補、『新訂増補和蘭藥鏡』刊行。		高橋由一生
天保 3 年 (1832)			ワーグマン生
天保 4 年 (1833)	宇田川榕菴、『植學啓原』刊行。 渡邊崋山、この頃『客坐掌記』記す。		
天保 8 年 (1837)	宇田川榕菴、『舎密開宗』刊行開始。 横井燦『泰西藥名早引』刊行。		
天保 13 年 (1842)			百武兼行生
弘化 2 年 (1845)	『厚生新編』の翻訳この頃終わる		

弘化3年 (1845)	宇田川興齋、天文台訳員となる。		宇田川榕菴没
弘化4年 (1847)	『舎密開宗』の刊行この頃終わる。『舎密開宗 六編』この頃刊行。 小野蘭山著、井口楽三校訂、『本草綱目啓蒙 重訂版』刊行開始。		国沢新九郎生
嘉永元年 (1848)	葛飾北斎、『画本彩色通』刊行。		
嘉永3年 (1850)	『本草綱目啓蒙 重訂版』刊行完了。		山本芳翠生
安政2年 (1855)	天文方蕃書和解御用から独立して、洋学所を設立。		五姓田義松生
安政3年 (1856)	洋学所、蕃書調所と改称。		浅井忠生
安政4年 (1857)	蕃書調所に絵図調所を設置。 川上冬崖、絵図調出役となる。		小山正太郎生
安政6年 (1859)			平木政次生
万延元年 (1860)	宇田川興齋 <small>こうさい</small> 、『萬寶新書 初篇』及び『萬寶新書 二篇』刊行。		
文久元年 (1861)	この頃宇田川興齋、津山に移る。 絵図調所、画学局と改称か。 川上冬崖、画学局出役となる。		
文久2年 (1862)	蕃書調所、洋書調所と改称。 高橋由一入局。 遣欧使節竹内保徳の一行、品川に帰着。		松岡寿生
文久3年 (1863)	洋書調所、開成所と改称。		原田直次郎生
元治元年 (1864)	高橋由一、開成所画学出役となる。 五姓田芳柳、横浜に居を移し、内外人肖像画を描く。 遣仏使節団、パリでフランス政府と絵画用油等の輸入を無税にする約定を結び、品川に帰着。		
慶応元年 (1865)	五姓田義松、ワグマンに師事。 川上冬崖、将軍家茂に従い西上。 ショイヤーの夫死亡。 開成所で田中芳男が亜麻を試験的に栽培し、その繊維から布を織る。		
慶応2年 (1866)	高橋由一、ワグマンに師事。		原撫松生 黒田清輝生

慶応 3 年 (1867)	パリ万国博覧会開催。(5月1日～11月2日) 高橋由一ら、パリ万国博覧会に油画出品 川上冬崖、この頃江戸に戻る。 島霞谷、開成所絵図調出役。	この頃、島霞谷「バラと扇子を持つ女性像(美人図)」、 高橋由一「丁髷姿の自画像」	
慶応 4 年 明治元年 (1868)	五姓田芳柳、私塾開設。 川上冬崖、沼田兵学校絵図方として招聘。 川上冬崖、新興開成所の筆生として、東京へ戻る。 萬國新聞紙に画材の広告掲載。	五姓田義松「13歳の自画像」	
明治 2 年 (1869)	川上冬崖、洋画塾、聴香読画館を開塾。 細川潤次郎編、『新法須知』刊行。 大坂舎密局開局 田中芳男『明治月刊』に「亜麻布之説」を記す。		
明治 3 年 (1870)	国沢新九郎渡英。		
明治 4 年 (1871)	新貨条例布告、新単位「円」。 百武兼行渡欧。 川上冬崖『西画指南』前編刊行。 高橋由一、「油画開業規則書」を作る。		
明治 5 年 (1872)	小山正太郎、冬崖の聴香読画館に入門。 山本芳翠、五姓田芳柳に入門。 高橋由一、飯田利兵衛にキャンバスを作らせる。 東京～横浜間に、我が国初の鉄道開通 北海道開拓使顧問、トーマス・アンチセルが、北海道での 亜麻の栽培を進言。	高橋由一「花魁」	
明治 6 年 (1873)	広瀬元周、翻訳書『工作堤要』を刊行。 ウイーン万国博覧会開催。(5月1日～11月2日) 高橋由一、天絵楼を創設。 松岡寿、聴香読画館に入門。 宮崎柳條、『西洋百工新書 外編一二三』刊行。		
明治 7 年 (1874)	旧来の貨幣の一般流通禁止。 国沢新九郎、西洋画を学び帰国。 百武兼行帰国、同年渡英。 安藤忠太郎、この頃天絵楼に入門。 武田昌次、『教草』に「油一覽」を記す。 清野三治〔齋藤正三郎〕、ウイーンより帰国し、内務省博物 局構内でワニスの研究を始めた。		

明治 8 年 (1875)	工部卿伊藤博文は工学寮で美術教育をするための伺書を提出。 国沢新九郎、彰技堂開塾。 高橋由一、天絵楼を天絵社と改称。 高橋由一、絵具問屋村田宗清らに油画面材の製造法を教授する。 彭城貞徳、天絵社に入門。 岩橋教章『喫国博覧会報告書』に「洋画見聞録」を記す。		
明治 9 年 (1876)	第一回内国勸業博覧会開催。 京橋槍屋町で、五姓田義松主催の展覧会を開催。 浅井忠、彰技堂に入門。 米国博覧会事務局、『米国博覧会報告書』刊行。 『農業雑誌』に「亞麻の説」を記す。 フィラデルフィア万国博覧会開催。(5月10日～11月10日) フォンタネージが来日する。 工部美術学校が開設される。 山本芳翠、五姓田義松、浅井忠、高橋源吉、彭城貞徳ら入学、小山正太郎同校助手となる。 高橋由一はフォンタネージの教えを受ける。 本多錦吉郎、この頃油絵具の自製を試みる。 内田弥一、『百科全書』に「画学及彫像」を記す。		
明治 10 年 (1877)	宇都宮三郎が工作局次長の任を命ぜられる。 高橋由一、天絵社門人伊藤藤兵衛の願いを容れ、絵具の製造販売を許し、村田宗清と競わせる。 本多錦吉郎、彰技堂を継ぐ。 五姓田義松、工部美術学校退学。 第一回内国勸業博覧会(8月21日～11月30日)	高橋由一「鮭」、「鱈梅花」、 「本牧海岸」	国沢新九郎没
明治 11 年 (1878)	フォンタネージ、工部美術学校を辞し帰国。 高橋源吉、浅井忠、小山正太郎、松岡寿ら、工部美術学校退学。 百武兼行、山本芳翠渡仏。 読売新聞に伊藤彩料舗の広告。	五姓田義松「明治帝御眺望 図」、「三州豊橋」	
明治 12 年 (1879)	天絵社、東京府の認可を受けて、私学、天絵学舎となる。 百武兼行、帰国。		
明治 13 年 (1880)	松岡寿、百武兼行渡伊。 五姓田義松渡仏。 大平廣正、「油画道志る遍」筆写。	百武兼行、留学中「イタリ ア風俗」	

明治14年 (1881)	岡忠精、彰義堂入学 第二回内国勸業博覧会開催。	百武兼行「西洋婦人像」 高橋由一「宮城県庁門前 図」、「松島五大堂図」	川上冬崖没
明治15年 (1882)	百武兼行帰国。 原田直次郎、由一の天絵学舎に入門。 坂広、彰義堂入学 伊藤傳編、『鮮美篇 家事経済』刊行。 坂広、『油繪寫景指南』筆写	松岡寿「凱旋門」	フォンタネー ジ没
明治16年 (1883)	工部美術学校廃校。 坂広、「油画道志留辺」筆写。		
明治17年 (1884)	天絵学舎廃校。 原田直次郎渡独。 黒田清輝渡仏。 岡忠精、坂広、彰義堂卒業。		百武兼行没
明治19年 (1886)	農商務省山林局編訳、『松脂採取法』刊行。		
明治20年 (1887)	山本芳翠、フランスより帰国。 原田直次郎、ドイツより帰国。 松岡寿渡仏。 五姓田義松渡米。 小山正太郎、不同舎開設。 中村不折、不同舎入門。 林東海、『起業製法全書 実施国益製法三千式 続編』刊行。 内田彌一翻訳書「畫学ノ由来」を『大日本教育會雑誌』(62 ～65号)に連載する。		
明治21年 (1888)	杉本幸太郎編、『實地経験百工自在』刊行。 原田直次郎、鐘美館開設。 山本芳翠、生巧館開設。 松岡寿帰国。		
明治22年 (1889)	東京美術学校開校。 明治美術会創立に際し、源吉は創立委員になる。 五姓田義松帰国。		
明治23年 (1890)	五姓田義松渡米、同年帰国。 「商人名家 東京買物独案内」に村田宗清の記述。 本多錦吉郎、「油繪山水訣」を『画学類纂』に連載。	本多錦吉郎「羽衣天女」	
明治24年 (1891)	高橋由一病床の身となる。		ワーグマン没
明治25年 (1892)	『高橋由一履歴』刊行。		五姓田芳柳没

明治26年 (1893)	黒田清輝帰国。 旧天絵学社中主催、油絵沿革展覧会開催。		
明治27年 (1894)			高橋由一没
明治28年 (1895)	『科学工業全書』		
明治29年 (1896)			
明治30年 (1897)	清野三治(齋藤正三郎)『澳國博覽會参同紀要』に「澳國博覽會後油漆髹ノ實況」を記す。		
明治31年 (1898)	森林太郎他撰、『洋畫手引草』		
明治32年 (1899)			
明治33年 (1900)			
明治34年 (1901)	『科学工業全書』		
明治35年 (1902)	交詢社編、『宇都宮氏経歴談』刊行。		
明治36年 (1903)			
明治37年 (1904)			
明治38年 (1905)	橋本邦助、辻永、『洋画一斑』刊行。 中村勝治郎、『水彩及油畫法』刊行。		
明治39年 (1906)	中村不折、『画道一斑』を刊行か。 印藤眞楯、『油繪階梯』刊行。		
明治40年 (1907)			
明治41年 (1908)			
明治42年 (1909)	大日本國民中学會(中村不折、満谷國四郎ら)編、『絵画独習書』刊行。 大日本絵画講習会、『洋画材料品日本画用品明細目録』刊行。		